



### 「グローバル都市・川崎」を日本の多文化共生のモデル都市に

## ひら お こう じ かいちょう 平尾 光司 会長

### プロフィール

1939年生まれ。一橋大学社会学部卒業、日本長期信用銀行(以下長銀)入行。ペンシルベニア大学大学院フルブライト研究員、長銀総合研究所社長、長銀副頭取などを経て、現在、昭和女子大学名誉理事、専修大学社会科学研究所研究参与、川崎市産業政策研究所特別顧問。著書に『ベンチャービジネス』(日本経済新聞)、訳書にシリアンテット『愚者の黄金』(同)などがある。川崎市との関わりは、高津区にある「かながわサイエンスパーク(KSP)」設立時に始まり、川崎市総合計画有識者会議委員や川崎市国際戦略構想会議委員、川崎市国際化施策推進プラン懇談会座長など、継続して30年以上にわたる。2018年6月(公財)川崎市国際交流協会会長就任。

### 9年前、川崎市都市政策に関する報告書『川崎市都市白書』(2009年)の中で、川崎の国際化を提言されていますね

はい。「川崎市都市白書」は、私が専修大学経済学部で教鞭を取っていたころ、川崎市の皆さんとともにまとめたものです。

川崎市の強みは、これまでの産業や環境技術の集積があること、東京と横浜という首都圏マーケットの中心であり、羽田空港や川崎港など交通アクセスが良く、働く人の質の高さが日本のトップクラスであることです。

そして、グローバル化時代には、新しく外国の企業や人々にどんどん市内に進出してもらうと同時に、現在市内に暮らしている約4万人の外国籍の方々にも、市民として一緒に川崎市の発展に向けて参加していただくことで、経済の面だけでなく、もっと多様でクリエイティブな街、イノベーションが展開する街になると信じています。

### ご自身は、アメリカ留学時代から息の長い国際交流を続けていらっしゃいますね

そうですね。とても印象的でかけがえないつながりが2つあります。

ひとつめは、留学時代に会った、アジアからの留学生たちとの交流です。私の初めての国際交流は、アメリカでルー

ムメイトのタイの留学生との共同生活です。共同自炊で、ナムプラー(魚醤)やパクチーと、味噌汁や納豆という食文化の交流から始まりました。後にタイの副総理になった彼とは親交を続け、今年の7月、タイの洞窟から子どもたちが無事救出された際にもメールのやり取りをしました。他にも、インドやパキスタン、フィリピンなど、多様な文化に触れた留学生たちとの交流は、私の人生の大切な財産になりました。その頃みんなで作って食べた各地のカレーの奥深さに魅かれ、私の子どもが小さかったころは、よく家でカレーを作りました。スパイスはもちろん自分でミックスしましたよ。

もうひとつの大切なつながりは、私を家族の一員として迎え入れ、アメリカの家庭生活を体験させてくれたホストファミリーとの交流で、今は三世代にわたって家族ぐるみのおつきあいをしています。私がお世話になったホストファーザーが最近亡くなったので、9月にアメリカに行くときはお墓参りをして、ご家族に会う予定です。

国際交流で大切なことは、相手を想うことと、その気持ちを伝えることだと思います。また、表面的なおもてなしではなく、相手を受け入れること。銀行員時代に家族を連れて約10年暮らしたニューヨークの郊外でも、アメリカの地域社会や学校がどのように外国人を受け入れるのか、その温かさを肌身で感じました。

語学には私も苦労しましたが、下手でもいいから伝えることが大事です。

### 川崎市と川崎市国際交流センターの「これから」は

川崎市には今、約4万人の外国籍の方が生活されています。今後、もっと多くの方に川崎市に住みたい、川崎市で働きたいと選んでもらえるような街を目指していきたいですね。外国人留学生も全国的にこれからも増えていくと思いますし、外国籍市民が日本語や日本文化を学んだり、日本人市民と交流する場だけでなく、母国語や料理などを紹介したりする機会があることも大切だと思います。

川崎市は、日本の中でも多様性に富む多文化共生社会のモデル都市になりつつあります。川崎市国際交流センターでは、市民からのご意見をうかがいながら、一人ひとりに地域社会作りに参加していただき、多文化共生社会として成長していく地域作りを進めていきたいと思っています。

これまで訪れた国は45か国、パスポートは12冊目という平尾会長。それぞれの国の歴史と文化を尊重するワールドワイドな視野を持ちつつ、人と人との交流を大切にされる温かいお人柄で、これからの川崎の国際交流のあり方を自ら実践されていると感じました。

(取材・文: 編集ボランティア 森 千里)